

ウォーキング雑感(その2)



(一社)日本機械土工協会
常務理事 保坂 益男

歩くには金がかからない

旧街道を歩くことに興味を持ち、文献などを調査、参考にして、できるだけ古い時代の道を歩くことにしました。今までに、旧東海道はじめ、旧中山道、旧甲州街道や姫街道などを歩き通してきました。無理はせずに、連休や春、秋の気温や天候の良い時をねらって歩くので、1本の街道を歩くのに5年以上かけております。

当時協会の山崎会長から、「歩くのはお金が掛からないから、良い趣味だね。」といわれましたが、本当は結構お金の掛かる趣味です。街道を一気に歩き通すのではない為、静岡県のお宅ないしは東京から現地へ前泊し、朝5時に起床して前夜に買ったおにぎりなどを食べ、5時半ごろから歩き始めます。1日20～25kmを歩きますが、歩き始めてからは、二人の体調もあり、どこまで歩け通せるか判らないため、あらかじめ宿を予約することはできません。午後2時～3時ごろにその日の歩きを終わり、宿探しをはじめます。

たまたま歩き終わった近くの町で大きな行事があったりすると、宿を取ることができず、最寄りの駅から電車でいくつか離れたところまで移動し、その駅前の宿に泊まる羽目に遭います。

予め計画した全コースを歩き終わっての戻りは、疲れた体を最寄りの駅まで歩いて終了とし、その日のうちに静岡か東京へ戻ることになりません。また次のつなぎは、電車で前に終わった駅から継いで歩くことを何回も繰り返します。ただ、在来線の電車や旧国道は、明治大正時代の町や集落をつないで作られているためか、大抵は旧街道の近くを在来線が通っていて、ほとんど電車を利用することができ、これは助かります。

旧中山道 600 km近くを私と同じような形で歩き通すと、継いで歩くための交通費と宿泊代で、一人大体100万円位かかることになるという聞いてビックリした記憶があります。一つの街道を何年もかけて歩いているので、そのような金銭感覚がなく、「歩くのはお金が掛からないから良い趣味だね」と言われた山崎元会長も、一つの街道を歩き通すために実際掛かる費用を聞いたらビックリしたのではないのでしょうか。

旧街道の整備状況

街道歩きのはじめは旧東海道、次に中山道、

甲州街道と歩き、その合間に姫街道や、同好会の人々といろいろなコースなどを歩いております。旧東海道は集落のあるところではけっこう整備されているところがあり、特に滋賀県や静岡県などの一部には旧道沿いの民家に江戸時代の屋号を明記し、旧道の通りを観光化しているところがあります。印象に残るのは静岡市の丸子地区と藤枝市の岡部地区の境にある蔦の細道の丸子地区、また滋賀県は旧道全体がよく整備されております。その反対は三重県です。鈴鹿の峠から四日市にかけて沿道の家屋はひさしなどが独特の作りで、家の塗装などもおもむきがあって良いのですが、七里の渡しまで続く旧道は、観光化された亀山市の関宿をのぞけば、古から続く旧道の歴史的・文化的価値を認めないためか、整備されているとは言い難い。

峠上りは京都側から

列島の造山活動の力のかかり具合か、山の風化の速度が違うためかどうかは分かりませんが、東海道や中山道の峠は、東京側から峠に登る方が急坂で、京都側が緩やかになっているところが多いように思います。たとえば島田市から大井川を渡り金谷峠となりますが、金谷側は山の頂上に向かって玉石を敷いた直線の道が作られているため、ブルドーザならともかく、自動車では全く登れず、人間でも大変な急坂になります。もちろん人家はありません。峠の頂きから京都側、小夜の中山に下りてゆく旧道はゆったりした傾斜で、軽自動車一台が辛うじて通れるぐらいの道幅ですが、それでも山の沿道には集落があり、今も住んでいる人々の生活道路としてまだ機能しております。

道がなくなる

旧道は里へ下りると、近代化の波の中で拡幅されておりますが、集落から集落をつなぐ生活道路として、旧道はまだかなりが生き残っております。しかし、たとえば東京側から歩き天竜川に突き当たっても、そこに橋はなく現在の国道一号線へ出て、天竜川を渡るには、そこから2キロ近く河口へ向かって堤防下の道を下ることになります。

しかし旧中山道は山間部を通るためか、馬籠宿などごく一部の宿場が整備観光化されているだけで、未整備のところが多く道路も明治以降自動車を通れる道が作られたためか、特に山間部などは江戸時代からの道が放置されていたためか、当時の面影のある道が多く残っております。しかし突然道がなくなり、本来は道が通っていたと思われる土地の上に工場や民家が立っており、なんとその屋敷内を歩ける道ができており、家の軒下を歩くようなところもあります。おそらく国は自動車道の整備に気を取られ、自動車の通れない旧街道部分の管理が弱かったため、家や工場を立てられていることに気がつかなかったものと思われます。

旧中山道には、鉄道や自動車の通れる新道から遠く離れ、おそらく近代の生活が出来なくなったためか、山間部のなかに集落やその近くにあった工場などが廃屋となって、そっくり残っているようなところがあります。また京都側から歩いて、峠へ続く道には、立派な乗用車が普通車では通れない狭い道を、里から山に向かってやみくもに走って、どうにもならなくなって乗り捨てたまま、道をふさいで何年もたった姿で鎮座しているようなところもあります。

(つづく)